



訪れる人を魅了し、暮らす人には優しい、市民幸福度の高いまち 小樽市



小樽市基礎データ

総人口（住基台帳）	119,352人 平成29年9月末現在	漁獲高（金額ベース）	3,334,782千円 平成28年中
高齢人口（高齢化率）	46,147（38.66）人（%） 平成29年9月末現在	製造品出荷額等（総額）	17,308,143万円 平成26年工業統計調査
世帯数	64,616世帯 平成29年9月末現在	卸・小売年間販売額	26,151,683万円 平成26年商業統計調査
人口密度	489.5人／km ² 平成29年9月末現在	一般会計規模（歳出額予算ベース）	55,271,433千円 平成29年度当初予算（歳出額ベース）
面積	243.83km ² 平成28年10月1日現在	市の花	ツツジ 昭和43.5.28制定

問合せ 総務部広報広聴課 0134-32-4111

小樽市の紹介

小樽市は、市街地の一方が日本海に面し、他の三方を山々に囲まれた坂の多いまちで、小樽運河とその周辺の石造り倉庫群など、小樽の繁栄を現在に伝える歴史的な建造物やまち並みが、近年は観光資源として見直され、年間約800万人の観光客の皆様を訪れていただいています。

こうした流れをさらに発展させ、本市の活性化に繋げていくため、現在、新たなまちづくりの指針となる総合計画の策定作業に取り組んでいます。新しい総合計画は、平成31年度からスタートする予定ですが、総合計画の策定に際しては、小樽市自治基本条例に基づき、市民の皆様とともに計画を作り上げていくという視点に立ち、市政の基本的な方向性を皆様と共有できる計画を目指しています。

また、人口減少が大きな課題となっていることから、平成27年10月には、小樽市総合戦略を策定し、「子育て世代をはじめ、全ての居住者に優しい生活利便性の向上」、「強みを活かした産業振興と、新たな人の流れの創出」、「札幌圏や北しりべし・後志地域におけ

る、広域連携の推進」を基本目標として、本市の歴史や文化など、首都圏や大都市にはない資源・魅力を国内外に発信しながら、市民の生活基盤や企業の活動基盤の確保を図るための施策を推進しています。

平成20年3月には、小樽商科大学との間で、地域の発展と人材育成等に寄与することを目的に包括連携協定を締結するとともに、平成28年度には、北海道科学大学、北海道職業能力開発大学校との間で包括連携協定を締結しています。

小樽商科大学では、学生が地域に出て、課題解決や活性化の取組を行うことにより、地域における協働の土壌が醸成されつつあるほか、本年度からは、本市の人口減少要因の分析を市と共同で研究するなど、連携を進めています。また、北海道科学大学は、保健医療や都市環境などの視点から、北海道職業能力開発大学校は、ものづくりをはじめとした産業振興や人材育成などの視点から、それぞれ本市のまちづくりに連携・協力をいただいています。

小樽港の利用促進

新日本海フェリーの小樽～新潟航路に、平成29年3月の「らべんだあ」に続き、6月に、新造船「あざれあ」が就航しました。

これにより、新潟航路は全便が、午後5時に小樽港から出港し、翌朝午前9時に新潟へ到着する新ダイヤに統一され、道産の生鮮品を関東圏へこれまでより早く届けることが可能になりました。観光や出張などでも、より多くのお客様に小樽港からフェリーを利用させていただくことを期待しています。

また、クルーズ客船の誘致についても取組を進めており、平成29年11月には都内で「小樽港クルーズプロモーション」を開催し、多数の旅行会社や船会社のエージェント等の参加をいただきました。

クルーズ客船で寄港される乗客の皆様には、小樽市内だけではなく、後志管内での滞在を楽しんでいただくため、今後も「小樽港へのクルーズ客船誘致」とともに、後志管内の市町村で広域連携による観光プロモーションを進めていきます。



駅前通りから望むクルーズ船「ぱしふいっくびーなす」

また、一昨年、本市との間で姉妹都市提携50周年を迎えたナホトカ市ですが、平成29年10月から11月にかけて、市長をはじめとする使

節団が訪問し、さらに関係を深めています。

今後、日本とロシアの間で、様々な経済協力が期待されていることから、これらの一連の動きを踏まえ、物流拠点としての本市の魅力や優位性を本市経済の活性化に繋げていきたいと考えています。



ナホトカ市で歓迎を受ける小樽市使節団

観光基本計画、第20回小樽雪あかりの路

平成29年3月、本市の観光振興の指針となる第二次小樽市観光基本計画を策定しました。本計画は、本市が観光都市として、持続的な発展を遂げるため、「ホンモノの小樽とふれあうー観光客と市民がふれあい、新しい発見があり、また来たいと思える街ー」を目指すべき姿として掲げており、本計画を基に、小樽が持つ、たくさんの魅力を市民の皆様と共有し、本市を訪れるより多くの観光客が、ホンモノの小樽に触れ合っただけのような観光施策を進めています。

また、平成30年2月9日から18日までの期間、「第20回小樽雪あかりの路」が開催されます。小樽雪あかりの路は、小樽市出身の伊藤整の詩集「雪明りの路」にちなんで命名され、期間中延べ12万本もの素朴なキャンドルの灯りが小樽の夜を照らし出します。

平成11年の開催当初より「参加型」「手づくり」にこだわっており、このイベントは、町

内会、各種団体をはじめ、市民ボランティアや、韓国・中国等からの多くの海外ボランティアの温かな支援、活躍によって成り立っています。



海外ボランティアが活躍する「小樽雪あかりの路」



浮き玉キャンドルが灯る手宮線会場

歴史・文化・芸術が彩るまちを目指して

現在、本市発展の礎を築いた諸先輩から引き継がれてきた文化や伝統、素晴らしい地域特性や資源をストーリー化し、地域経済の活性化に繋げていくため、日本遺産の認定に取り組んでいます。

単一の市町村内でストーリーが完結する「地域型」では、認定の前提条件となる、特徴ある歴史文化の保存・活用の方向性を定める「歴史文化基本構想」の策定を進める一方で、複数の市町村にわたってストーリーが展

開する「シリアル型」については、平成29年春に松前町など11市町が認定された、北前船のストーリーへの追加認定を目指しています。

また、開拓期以降、北海道産業を支えてきた炭鉱、鉄鋼・鉄道、港湾の3つのテーマでつなぎ、ストーリー展開を目指す「炭鉄港」の動きもあり、空知管内の自治体等と連携を図りながら、認定に向けて取組を進めています。



北海道最古の鉄道が残る「旧国鉄手宮線」

このほか、市内では、平成28年7月にオープンした「ステンドグラス美術館」(旧高橋倉庫)、「ミュージアムショップ」(旧荒田商会)に続き、平成29年8月には、小樽を代表する歴史的建造物の一つである「旧三井銀行小樽支店」が公開されるとともに、9月には、アールヌーヴォー・アールデコガラスと所蔵する絵画・彫刻を一堂に集めた「似鳥美術館」(旧北海道拓殖銀行小樽支店)も開館し、ニトリグループが運営する小樽芸術村のグラウンドオープンやホテルの開業なども続いています。

本市は、長年にわたり住宅地・商業地の下落が続いていましたが、国土交通省が発表した平成29年地価公示では、商業地では26年ぶりに上昇に転じるなど、投資意欲の高まりがみられます。こうした民間施設との連携も図りながら、歴史と文化、芸術による彩りが感じられるような特色あるまちづくりを進めていきたいと考えています。